海外講演報告

『通訳翻訳論と国際ビジネスコミュニケーション』

呉　春美

はじめに

2015年12月5日大連市にて神奈川大学宮陵会による講演会が開催された。国際都市大連は、歴史的にも日本との関わりが深いため、親日的で日本への関心が高いのだという。そのような背景があってか、参加者は大連在住の日本人以外は、多くが大連理工大学、大連交通大学などの日本語教育学科や通訳・翻訳コースに在籍する中国人教員と学生たちだった。そのために、本講演を私の実体験を中心に、以下3つのパートに分けて行った。

Ⅰ　通訳・翻訳と国際ビジネスコミュニケーションにおける役割
Ⅱ　「言葉の力とコミュニケーション」ワークショップ
Ⅲ　グローバリゼーションと通訳・翻訳の射程

まず講演を始めるまえに、ウォーミングアップを行った。

【ボディストレッチ → ボイストレーニング → メディテーション（瞑想）】

背伸びをして、首・肩甲骨を回し、手足をシェイクするボディストレッチで緊張をほぐした後、丹田呼吸法を取り入れたボイストレーニング（発声練習）をした。メディテーション（瞑想）では、グーグル社が採用していることで最近注目されている「マインドフルネス」（ヴィパサナ/vippasana）の準備段階である呼吸法（サマタ/samatha）を実践した。たった5分であるが、ウォーミングアップが終了した会場は、しんとした静けさとリラックスした雰囲気に包まれていた。

Ⅰ　通訳・翻訳と国際ビジネスコミュニケーションにおける役割

1. 通訳・翻訳の経歴

まず自己紹介を兼ねて、私の通訳・翻訳の経歴を紹介したい。過去30年間、国内外での商談から健

康食品や医療器具の展示会、チャータースクール（US）など教育関係のセミナーやワークショップ、ミミズの研究やピロリ菌などの医療セミナー、ピュリッツァーを受賞した『昭和天皇』の著者ヒュバート・ビックス（Hubert Bix）などのインタビュー、アルバータ州（カナダ）のオイルサンドや都市開発、海外からの薬用植物の輸入、動物園のアシカ、イギリスのスピーカー、スポーツターフやホテル仕様のカーペットの売り込み、チベット仏教展やミケランジェロの美術展、オリンピック招致のための日本芸能の紹介などさまざまな内容の通訳に携わった。

また貿易コレスポンデンス、医療機器のマニュアル、大手化粧品・自動車・ジュエリー関係の広告、不動産監査の報告書、都庁の英語案内、さまざまな契約書、音楽CDのジャケットや歌詞、環境問題の論文などの翻訳を手がけてきた。

これらはほんの一部だが、このように通訳・翻訳のジャンルが多岐多様に渡るのは特別めずらしいことではない。ロシア語の通訳者として著名な故・米原万理さんの言葉を拝借すると、「人間のすることすべて、人間が関わり、そこに異なる言語間のコミュニケーションのあるところはすべて通訳・翻訳の守備範囲といえる」（「不実な美女か貞淑な醜女か」新潮文庫）のである。

そのような守備範囲においての通訳者・翻訳者の役目は「情報と想いの伝達師」であり、状況によっては「異文化の交通整理係」に早変わりもする。そのため通訳には、(1) 通訳訓練 (2) 通訳内容における基本的な知識 (3) 異文化理解という3つの必要条件が求められる。

通訳＝「情報」と「想い」の伝達師、時に「異文化理解」のための交通整理係り

2. 通訳訓練法

(1) 発声練習・音読・シャドーイング

通訳は、ある音声を他言語の音声に変換することにより、意思疎通をはかる仕事である。そのため声の出し方が重要である。日本語は、「ん」以外はすべて子音と母音により構成されているが、英語はプロソディ（リズム、アクセント、イントネーション）、母音と子音の組み合わせ、子音のみの発音、特に破裂音や摩擦音が多く、声の出し方が日本語とは異なる。そのため表情筋と声帯を鍛えるためにも、また長い通訳時間に備えるためにも丹田呼吸による発声練習（ボイストレーニング）・音読・シャドーイングに慣れておくとよい。

自分のペースでできる音読の後は、シャドーイングに挑戦して欲しい。シャドー（影）という言葉どおり、聞こえてくる音源をそのままオウムのように発声していく。リスニング力の強化だけでなく、インプットとアウトプットの同時進行であることから、集中力を高める。シャドーイングは代表的な英語学習法のひとつとされるが、このような理由から本来は通訳の訓練法だった。外国語の音源は、標準語で話すプロのアナウンサーやナレーターのニュースやナレーション、スピーチが適しているが、ぜひ母国語の音源も試してみよう。

(2) 逐次・同時通訳練習とサイト・トランスレーション

シャドーイングの後は逐次通訳の練習に移ろう。一文またはパラグラフなど区切りのよい箇所で音源を一時停止し、通訳をする。何度か繰り返して慣れてくると、同時通訳の練習に移るとよい。内容は簡単な日常会話や自分の興味あるテーマや専門分野から始めるとよい。逐次は通訳のための時間があるため、文章を作りやすいが、同時通訳の場合、日本語と英語では特に動詞のように語彙の順序が異なるために特有の通訳法が必要とされる。中国語と英語の語順は似ているため、日本語と英語の同時通訳に比べてそれほど難しくないのかもしれない。将来日本語と英語、中国語と英語、日本語と中国語の通訳訓練法を共同研究すればおもしろいのではないだろうか。

また通訳現場では書類や資料などを読みながら通訳することも多く、サイト・トランスレーションとよばれる新聞や雑誌を読みながら、声に出して通訳の練習を日ごろからしておくとよい。

このような通訳訓練法は、実は英語学習法としても非常に効果的である。

(3) 通訳と翻訳のススメ

「私は、通訳は好きだが、翻訳は苦手」とか「翻訳は好きだが、通訳は嫌い」というコメントをよく聞くが、どうやら一般に通訳派と翻訳派とに分かれるようである。通訳と翻訳はコミュニケーションの媒体としての役割は同じだが、通訳は音声であり、翻訳は文字である。また通訳は耳から入ってくる音源を口頭にて一瞬にして訳出するが、翻訳は入稿の締切りさえ間に合えばよく、じっくりと考える時間がある。実はこのように異なるプロセスだからこそ、より相乗効果が生まれる。せめて訓練中だけでも通訳・翻訳の両方を同時に取り組まれることを勧めたい。

また私自身の経験から、通訳から翻訳の仕事に、またその反対に翻訳から通訳の仕事にと次の仕事に結びつく機会が増えることもつけ加えておきたい。

3. 通訳現場から

(1) 通訳時間と準備時間

最初に紹介したように、通訳・翻訳の仕事は多様多岐にわたる。そのため通訳・翻訳の仕事が入るつど、試験前の一夜漬けのような勉強を余儀なくされることが多い。

たとえばある年、アメリカ政府高官の来日インタビューを通訳することになったのだが、彼はユダヤ人で訛りが強いだけでなく、早口でもあった。

たった30分のインタビューのために2か月間という準備期間中、毎日寸暇を惜しんでカセットテープで繰り返し彼のスピーチを聴き、シャドーイングをすることで彼の話し方に慣れるようにした。ある程度慣れてきたら、逐次通訳の練習をする。

そして守備範囲が大きいため、彼の著書を買い集め、関連事項の単語リストをつくり、テーマ別に整理をしながらノートを作成する。未知の分野ではそのための仕込みが大切で、できるだけの準備をしなくてはならない。最短時間でその分野についてもっとも学ぶのは、誰でもない、通訳者や翻訳者自身かもしれない。それは学校教育でその教科をいちばん学ぶのが、生徒や学生ではなく、教員自身であることにも似ている。

しかし未知の分野の仕事は安易に引き受けるべきではない。通常はしっかりと準備時間や打ち合わせがあるのだが、ぶっつけ本番さながらの状況に陥ることは決して稀ではない。

とはいえ、万全の準備をしていても手の施しようがない状況に陥ることもある。

(2) IBMのテキサス工場長

かつてオースティンIBM工場は、アメリカ全土のIBM工場の中で最も生産効率が悪く、閉鎖を余儀なくされようとしていた。そこへ若い工場長が着任したのだった。日本でリストラというとまず人員削減を意味することが多いが、彼は違っていた。工場の生産ライン、流通システムの再編成、人員の再配

備や削減を実行することで、もっとも生産性のあるIBM工場へと改革したのだった。その工場長を東京の日本IBM本社にお招きして、社内セミナ―が開催され、彼の通訳を務めることになった。

ところがこの優秀な工場長はテキサス出身で、テキサス訛りが非常に強く、おまけに早口だった。そのため彼の言っていることが理解できない。いわゆる「通訳泣かせの訛り」である。結局同行のアメリカ人同僚が英語から英語に通訳してくださり、日本語に通訳したのだった。

工場長への申し訳ない気持ちと、通訳はまるで恥をかくための仕事ではないかと恨めしく思うのだった。

(3) ラビ・バトラの経済セミナーとEMシンポジウム

ある年1000人が参加するシンポジウムでの通訳を依頼された。EM（effective microorganisms）とは有効微生物集合群のことで、農業や環境改善に利用される。

実はその数か月前に、アメリカの経済学者ラビ・バトラのセミナーで通訳をしたのだが、はじめて300人という大勢の前だったため、緊張で1週間前からほとんど眠れなくなってしまった。通訳は集中力が勝負である。わずか数秒間だったが、その集中力が切れてしまった。英語にはひとつの単語で、いくつも異なる意味をもつものが多くある。speculationを「投機」と訳すべきところを、投資に興味がない私はつい「推論」と訳してしまい、話のつじつまが合わなくなった。急いで訂正したものの、入れる穴があれば、入ってしまいたい思いだった。

300人を前にそのような有様だったのに、今度は1000人である。「これ以上、恥をかきたくない。断ろう。」と思いつつも、心のどこかで悪魔の囁きも聞こえてくる。「もしここを乗り超えられなければ、その後の自分はない。」さんざん迷った末、引き受けることにした。

まず私の声は通りにくいので、ボイストレーニングを受けた。そして原発言者であるワシントン州議員から事前に送っていただいた原稿を翻訳して、時間を計り、準備は万端である。EMに関しては、すでに関連書を日英翻訳しており、何度か日本各地やアメリカ、タイのEM農場を訪問していたことから基礎知識はある程度もっていた。

しかし当日会場は1000人で埋め尽くされている。その熱気に不安が再びこみ上げてくるのだが、そこでボイストレーナーのことばを思い出す。「緊張をしっかり感じて、息を大きく吐き出す。これを何度も繰り返すように」と。確かに深呼吸を繰り返していくうちに、なんとか平常心に戻ることができた。これが本講演はじめに行ったウォーミングアップのきっかけである。

さて、いよいよ本番である。議員のスピーチと通訳交互の掛け合いがスムーズに進む。いい出だしが掴めた。ところが原稿を読み上げているうちに、何かがおかしいと気づいた。通訳は情報を正確に伝えるだけでなく、話し手の気持ちを、聞き手の耳にではなく心に届けることが仕事である。緊張感の克服と時間内に収めることばかりに気をとられて、一番大切なことを忘れていたのだった。議員のことばを一つ一つ聴き、受け止め、彼の情報とEMへの熱い思いをオーディエンスに届けるようになったのは、すでに終盤だった。

たとえ参加者が300人であろうと1000人であろうと同じである。伝える相手は一人ひとりであることをここで学んだのだった。

(4) ペルーでの通訳体験

通訳内容が多岐にわたるとお伝えしたが、また通訳現場も多岐にわたる。日本、タイ、中国、シンガポール、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ諸国、ペルーや南アフリカでのオフィス、ホテル、大使館、役所、大学、展示会場、農場、工場などである。ある時はカナダ・カルガリー市上空を飛ぶヘリコプターの中で、ペルーの4000メートル以上の高地でふらふらと高山病にかかりながら、またリマから飛行機、ジープ、ボートを乗り継いで、薬用植物を探し求めてアマゾンのジャングル奥深くまで入ることもあった。

毎年ペルーに出張していたが、1回目は1995年だった。その年の12月17日リマの日本大使公邸占拠

事件が起きた。占拠後まもなく子どもや女性たちは解放されたものの、翌年4月22日にフジモリ大統領率いるペルー特別警察部隊が公邸に突撃して解決した。およそ4か月間という長い膠着状況が続いたことになる。私はその日わずかなタイミングで人質にならずにすんだが、それは痛ましい事件であった。リマから帰国して、日本がいかに平和で豊かな国であるかをつくづくと実感したのだった。

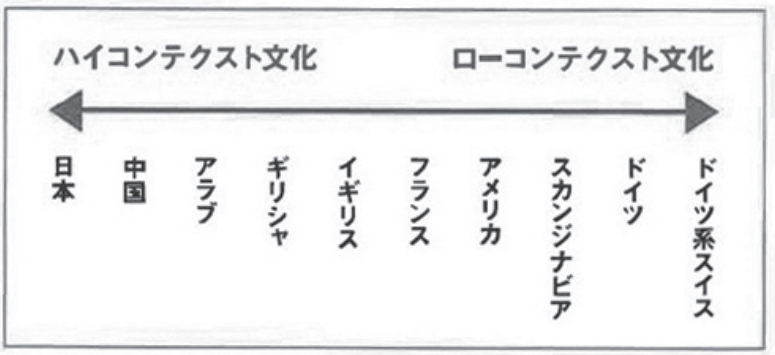
アマゾンの街プカルパでは、人々の貧しい暮らしぶりに息をのむこともあった。ホームレスの人々が、ドアも窓のカーテンも床もない地べたに、まるで折り重なるように眠り、生活をしていたのを見たことがある。プカルパ郊外のジャングルは貧困層が多く、当時そのような地域はテロリストの温床でもあった。テロリズムや地域紛争は、決して宗教や民族、文化習慣の違いからの衝突だけでなく、殖民地政策から始まった経済の格差、特に教育や深刻な貧困問題がその主要因であることは否めない。

4. ビジネス現場と異文化理解

サミュエル・ハンチントンは、「人びとは祖先や宗教、言語、歴史、価値観、習慣、制度などに関連して自分たちを定義づけている。たとえば、部族や人種グループ、宗教的な共同社会、国家、そして最も広いレベルでは文明というように、文化的なグループと一体化する」と言及している。(『文明の衝突と21世紀の日本』) 固有文化によってコミュニケーションスタイルもそれぞれ異なるわけだから、当然商談スタイルも異なってくる。

欧米人と日本人の商談スタイルの違いを何度か経験した。日本人のクライアントは、「まず状況をよく理解していただいてから……」と状況説明から入り、結論はどちらかといえばオープンエンドにするのは決して稀ではない。アメリカ人やオランダ人など特に欧米人の聞き手は、最初はおとなしく聞いているが、状況説明が長くなるにつれて次第にイライラしてくるのが伝わってくる。そして、「What does he want to say?（いったい彼は何が言いたいんだ？）」と通訳に聞いてくる。そのような時は、「お話中すみませんが……」と日本人クライアントに先にお話を整理させていただく。まず先方に結論から伝え、その結論を裏づける理由や例、データを1、2、3と挙げ、そして再度結論を強調する。いわゆる【PREP】（point→reasons and examples→point）と【KISS】（Keep it simple and short. 簡潔に短く）スタイルである。

アメリカの文化人類学者エドワード・ホールによる「高コンテクストと低コンテクスト文化」という有名な概念がある。これは、コンテクスト（背景）というその国や地域の文化的共有度の高さ、低さを意味する。



引用文献「Beyond culture」Edward.T.Hall

高コンテクストには日本・中国・アラブ諸国があり、低コンテクストは、ドイツ・スカンジナビア諸国・アメリカなどが例として挙げられている。国際ビジネスは異国間で行われるため低コンテクストの状況だと言ってよいだろう。当然日本のように情緒的で「あ・うん」のようなコミュニケーションスタ

イルは、異文化度の高い国では通用しない。そのため前述のPREPとKISSスタイルが求められる。そのような低コンテクストにおけるウィンウィンという着地点を見出すファシリテーター（サポート役）が通訳の役目でもある。一般に通訳者自身が、言語習得の課程において異文化体験をしているため、文化的咀嚼はそれほど難しくないはずである。

5. 翻訳

(1) 出版翻訳

通訳から翻訳の仕事に結びつき、またその反対もあると前述したが、ゴースト・トランスレーター（正式な翻訳者に代わって、実際に翻訳する人）として何冊か本を翻訳していくうちに、いつしか実名で翻訳本やビジネス英語などの実用本を上梓する機会をいただいた。

拙著・翻訳本の一部

出版翻訳の仕事が入ると、まず原文を読んで真意を把握する。そしてターゲットである読者の年齢層や性別、職業などを確認して、著者と読者の擦り合わせをする。たとえば、シモア・パペートMIT教授の『Lego教育心理学』の翻訳や「The EAST」の『鎌倉時代の仏教シリーズ（道元・親鸞・法然など）』や『雅楽』を執筆する場合の主な読者は教育関係者である。ラビ・バトラの『宇宙意識と波動』は男性サラリーマン、『ビジネスレターとEメールの書き方』は性別に関係なく会社員や自営業者が多い。『ブルース・リー』は格闘技に興味をもつ10代から、かつてブルース・リーに憧れていた大人の男性が対象で、その年齢層に幅がある。そのため雑誌のように軽く、読みやすい文体にしなければならないし、当然漢字とひらがなの割合も変わってくる。

故・米原万理さんは、「訳文が多少読みづらくても本文に忠実であるべきか、原文の意図をはずさない範囲で魅力的な文章にするのか、いかにこの二人の女性を同時に追い求めるかは、翻訳者にとって永遠の課題である」（『不実な美女か　貞淑な醜女か』新潮文庫）と言及している。

(2) 通訳・翻訳の心構え

まだ駆け出しのころ某アメリカ企業の広告原稿の翻訳を担当していた。ある日私の英日翻訳と企業が最終的に発表した広告内容が異なっており、その旨を担当者に伝えると、「重要なのはあなたの翻訳が正しいかどうかではなく、日本のターゲット層の年代や職種を分析して、それをどう伝えるかです。」と諭されたのだった。それ以降肝に銘じて仕事をするようになった。

某ブランドジュエリーのホームページ（HP）の英語とフランス語の翻訳を4年間担当したことがある。余談だが、「ホームページ」の正しい英語は「ウェブサイト」（website）で、そのウェブサイトの1ページ目がホームページである。翻訳者は商品の背後にあるコンセプトをできるだけ理解して、ことば

を選択しなければならない。特にキャッチコピーの場合、特定の表現やたったひとつのことばについて数日間考え抜くこともあった。

通訳・翻訳はあくまで黒子である。発信者の「情報」と「想い」をどのように受取り側に届けるか、それだけを考えればいい。両者の着地点がみつかり、クライアントたちが喜んでくださる笑顔に力を与えられる。駆け出しのときに、自分のエゴや自尊心よりももっと大きなところで仕事をすることの大切さを教えられたことに今でも感謝している。

II　言葉の力とコミュニケーション

以上通訳・翻訳がどのような仕事なのか、国際ビジネスコミュニケーションにおける働きについて述べてきた。ここでは、その中核となる「ことばの力」を体感するワークショップに取り組んでみよう。

1. コミュニケーションの原風景

マラケッシュ・フナ市場

学生時代にモロッコを旅した。マラケッシュのフナ市場では、夕方になると人々が広場に集まり、買い物をしたり、屋台で食事をし、そして蛇使いやアクロバットなどの大道芸人のパーフォーマンスを楽しんでいる。その中にストーリー・テラー（語り部）の輪があった。人々は円陣になって座り、語り部の抑揚のある語り口に静かに聞きいったり、膝を叩きながら大声で笑い合い、実に生き生きとしていたのだった。アラビア語のため理解できないが、ことばの力、言い換えれば言霊が人々の心の琴線を奏で合う。今でも目を閉じると、鮮明にその光景が思い浮かぶ。

それが私にとって、コミュニケーションの原風景となった。

2. ワークショップ

（1）Who makes these changes?　　ジェラルディン・ルミ（13世紀ペルシャのスフィー詩人）

I shoot an arrow right it lands left.	槍を右の方向に放つと左に刺さる
I ride after a deer and find myself	鹿を追いかけると、
Chased by a hog.	豚に追いかけられている。
I plot to get what I want	自分の欲しいものを得ようと策略を練ると
And end up in prison.	いつのまにか刑務所に入っている。
I dig pits to trap others	誰かをおとそうと穴を掘っていると

And fall in.	自分がその穴に落ちている。
I should be suspicious	いったい自分は何を求めているのか
Of what I want.	わからない。

5人のグループをつくり、各自好きな2行を選んで、輪読する。高校の英語教師時代、メタファー（metaphor/撞着法）を教えるために、この詩を取り上げたことがある。一人の生徒が「Aさんの槍が飛ばないで、足元に落ちました」と言った。恥ずかしくて声が出ないAさんに槍を遠くに飛ばす気持ちで読んでごらんと促すと、I shoot an arrow right! とAさんは大きな声で読み上げた。即座にまわりの生徒たちが「今度は飛んだ！」と声を上げる。彼女たちには言葉を通して、空に飛んでいる槍が見えるのだった。

(2) 夜光杯　　王翰

葡萄美酒夜光杯	葡萄の美酒、夜光杯
欲飲琵琶馬上催	飲まんと欲すれば、琵琶馬上に催す
酔臥沙場君莫笑	酔うて沙場に臥すとも、君笑うことなかれ
古来征戦幾人回	古来征戦幾人か回（かえ）る

中国語ではじめて聴く「夜光杯」は東北財形大学の教授が朗読してくださり、会場内に美しく響いた。この他「空と風と星と詩」（韓国人詩人、尹東柱/ユン・ドンジュ 1917-1945）や「水俣の海に生きる」（杉本栄子）を取り上げた。戦後、日本はアジア諸国の中で最も早く経済成長を遂げた国であり、深刻な公害・薬害問題を経験してきている。水俣病を取りあげたのは、そのような事例から学んだことを、中国の現状に貢献できるのではないか、という思いもある。

国境を超えて、ことばのもつ美しさや力強さを共有できれば幸いである。

Ⅲ　グローバリゼーションと通訳・翻訳の射程

アメリカの社会人類学者アルジュン・アパデュライ（Arjun Apaddurai）は、急速なグローバリゼーションと文化変容について、ヒト・メディア・IT・カネ・イデオロギー（ethno-scape, media-scape, IT-scape, financial-scape, ideological-scape）という「5つの景観」（5 scapes）から言及し、世界を虚像（ラカン）として捉えている。

Ⅲ部では、5スケープから中国人の移民や留学の推移に関するデータを用いて中国が国内外にもたらす経済効果や文化変容について言及した。そして日本やヨーロッパの現状に見られるように、中国でもいずれ通訳・翻訳のニーズは限界を迎える時が到来するだろうと結論づけた。そのような社会的現象と個人的な限界の中で、通訳者・翻訳者はいったいどのような心の準備や対応をしておくとよいのだろうか。この章に関しては、別の機会に詳しく言及したい。

さいごに

「Q&Aタイム」では、異文化理解の現場ではどのようにウィンウィンの着地点を引き出すことができるのか、どのようなケースがあるのかという質問に集中した。通訳の範囲外であり、また時間の関係上、1958年アメリカバージニア州での黒人と白人間における人種隔離政策を打ち出し、ペルーとエクアドルの国境紛争などを解決に導いたとされるノルウェーの社会科学者ヨハン・ガルトゥングや「信頼が最も生じやすいのは、価値観や文化を共有する場合だ」（『文明の衝突』）と述べたサミュエル・ハンチントンの名前を挙げただけにとどまった。このような質問内容や参加者の積極的な姿勢は想定外であ

り、将来共同研究の可能性を感じると共にもっとディスカッションのための時間を設けておくべきだったと反省する。

最後に今回の講演の機会を与えてくださった秋山憲治教授をはじめ、講演だけでなく大連滞在中のサポートをしてくださった武井克真氏（宮陵会大連支部代表）、間中晟氏（宮陵会副会長）、勇真一郎氏（神奈川大学事務局次長）に心から感謝申し上げます。

後列は宮陵会大連支部会のみなさん、前列は左から武井克真氏、間中晟副会長、筆者、東北財形大学方愛卿教授、勇真一郎事務局次長

（ご　はるみ　神奈川大学経済学部特任教授）